MACF礼拝説教要旨
2021.01.17
【パウロの痛み】
ローマの信徒への手紙9章
9:1 わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。
わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、
9:2 わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。
9:3 わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。
9:4 彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、
約束は彼らのものです。
9:5 先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。
キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
1）イエス・キリストと出会ったパウロの変化
パウロは
9:2 わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。
と語り彼の心を吐露しています。
その背景について少し説明しておきます。
パウロはユダヤ人であり、その律法の教師でもありました。
彼は熱心なユダヤ教徒であり厳格な律法主義の中で生きてきました。
ある意味でエリートであり、自分もそういう思いを持っていたと思います。
パウロはキリストと呼ばれているイエスを憎んでいました。人々から救い主と
呼ばれ神の子とまで言われながら十字架で死んだイエスを救い主と信じることなど
パウロには考えられない神への冒涜と映っていました。
イエスがキリストであるなら十字架で殺されるはずはないとパウロは考えていました。
そして、律法を守り抜くこと以外に神からの救いはあり得ないと信じていたのです。
イエスをキリストと信じている人たちを迫害するためにダマスコに向かう途中
パウロは不思議な体験をします。
使徒言行録9章にそのことが書かれています。
9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、
9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。
9:3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。
9:4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。
9:5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。
9:6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」
9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。
9:8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。

のちにここにあるサウロはパウロと名前を変えられるのですが、彼にとってこのイエス・キリストとの出会いは衝撃的でした。
例えば、サウロはキリストを信頼しキリストの教える道に従って歩んでいる人たちを捕まえ、縛り上げ、連行しようとダマスコに
向かったのですが、その途中、光の中で現れたキリストは「なぜ、私を迫害するのか」とサウロに語るのです。
つまり、このキリストの心は常に「その道に生きる人たちと共に」ありました。キリスト者の苦難はキリストご自身のくなんでありキリスト者の悲しみ、痛みはキリストご自身の悲しみ痛みだということが表明されているからです。
弱く、迫害の対象になっているキリスト者の群れに対して「キリストは彼らは、そのまま私だ」と告げているのです。
それほど近しい存在としての救い主をサウロは知りませんでした。そんなに近くに語ってくださる神、神からの救い主をサウロは考えることができませんでした。
でも、そのお方から声をかけられ、サウロの心は

180度変化します。
使徒言行録9章の続きを読みます。
た。
9:9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。
9:10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。
9:11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。
今、彼は祈っている。
9:12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」
9:13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。
9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」
9:15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。
9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」
9:17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」
9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、
9:19 食事をして元気を取り戻した。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、
9:20 すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。
9:21 これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれは、エルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。また、ここへやって来たのも、彼らを縛り上げ、祭司長たちのところへ連行するためではなかったか。」
9:22 しかし、サウロはますます力を得て、イエスがメシアであることを論証し、ダマスコに住んでいるユダヤ人をうろたえさせた。

2）パウロの悲しみ・痛み
パウロはキリストとの出会いの中で「近づいてくださる救い主」「痛みや悲しみを分かち合ってくださる救い主イエス」に圧倒されます。
そしてイエス様からのアプローチはしっかり律法を守って救いを完成させよというものではなく、救い主自らが近づいて赦しをもたらし神の愛を示してくださり、恵みによって救ってくださることを知るのです。
厳格な律法を守ることでの救いではなく、恵みによる救いをパウロは体験的に知るのです。
本来なら、ユダヤ人たちは旧約の教えからイエス・キリストのメッセージや生き方を通して「愛と恵みと優しさに満ちた神」を
知るべきでした。
そのための様々な祝福、歴史があったはずでした。でもユダヤ人たちはその神の恵みを信頼せず、極めて自分勝手な組織を
形成し、言葉を大切にしながらも、その心は学んできませんでした。
全てが律法遵守ということに集中し、恵みの福音を届けるためにやってきたイエス様を殺してしまったのです。
それらのことごとをパウロは悲しみ、痛みとして理解しているのです。
＊＊＊ローマの信徒への手紙9章です。
9:2 わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。
9:3 わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。
9:4 彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。
9:5 先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。
キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。
＊＊
この悲しみについては「愛」の現れなのですが、辛い出来事です。
私たちは愛していても、相手のために何もできない場面があるのです。

例えば、自分が食欲がなく、食べることができなくてもある程度我慢しますが幼い息子が食欲がなく食べられない場合、親は心配しますが、何もできません。
親は子供のために代わって食べてあげることができません。愛してないわけではありません。親も食べられないほど悲しく心配になります。でも、親が身代わりに食べてあげることはできないのです。
神の恵みも同様です。私があなたに代わって神の恵みを受け取ってあげることができないのです。それは自分が受け取る以外にありません。そのためには自分にそれが必要であることの自覚が
必要であり、求める心が内側に育たなければ、必要を感じていないわけですから心の奥には
届きません。心の扉を閉めてしまっているからです。
パウロは、本来なら同胞のユダヤ人たちは神の恵みを受け取れるはずだったのに
それを拒否している。神の祝福を味わえるはずなのに、自分の頑張りで神の恵みを
押し出してしまっている、なんと残念なことだろう、辛いことだと悲しみを表明しているのです。
悲しい思い、歯痒い思いを感じているに違いありません。

私たちの家族や友人、知り合い、仲間がキリストの恵みを知ってくれればなぁと
思うことがあります。教える、伝える、というだけではなかなか難しいことを私たちは
味わっています。
文化的な違いもありますし、キリスト教って外国の宗教でしょうという感覚があります。
神の恵みを知ることで、神を近くに味わい、安心して生きていけるのになぁと
感じることがあります。
私たちは、しかし、絶望する必要はありません。
むしろ、祈ることで、聖霊が人々の
心に働き、その心に救いや助けを求める必要を感じる日が来ることを信じるのです。
そして、自らを彼らのために「しもべ」として仕えることができる内容があるかどうかを
考えながら生きる必要があります。その際、私たちは「しもべ」の形で生きる必要が
あります。気をつけないと、上から目線で「教えてあげる」という態度になりやすいので
生きる態度に要注意です。
祝福がありますように